

〈研究報告〉

家庭でのいのちの教育に対する母親の意識と 子どもへの関わり

志村千鶴子^{1)*} 浜口恵子¹⁾ 片岡優華¹⁾ 二村文子¹⁾ 今井淳子^{1)**}

Maternal Awareness and Involvement in Early Childhood Home Education
about Life and Death

Chizuko SHIMURA^{1)*} Keiko HAMAGUCHI¹⁾ Yuka KATAOKA¹⁾
Fumiko NIMURA¹⁾ Junko IMAI^{1)**}

本研究の目的は、幼児の母親を対象に、家庭でのいのちの教育に対する母親の意識と子どもへの関わりについて明らかにすることである。研究方法は、関東圏在住の母親8人に、60分程度の半構成的面接を行った。その結果、【混在する死のイメージと捉え方の変化】【幼少期からの死に関する体験】【妊娠・出産で深まったいのちや生に対する意識】【妊娠・出産を通して児から感じるいのちの存在】【妊娠・出産を通じたいのちの教育】【子どもの成長や保育園に合わせた関わり】【生き物を通じた夫婦での補完的な関わり】の7のカテゴリー、22のサブカテゴリーを抽出した。母親自身が、いのちの教育への意識が乏しく機会がないと感じながらも、妊娠・出産でいのちや生に対する意識が深まり、いのちの大切さを伝えたいと考えていた。また、妊娠・出産時から子どもに意図的に関わり、保育園でのいのちの教育を活かし、夫婦で子どもに関わっていた。

key words : いのちの教育、家庭教育、子ども、生死観

education about life and death, home education, children, one's view of life and death

I. 緒言

内閣府の平成28年版子供・若者白書によると、2015年の未成年の自殺者総数は554人であり、厚

生労働省の平成28年人口動態統計による死因順位別にみた年齢階級によると、自殺は10～14歳では死因の第2位、15～19歳では死因の第1位であり、10～14歳では前年よりも順位が上昇し

1) 創価大学看護学部 Soka University, Faculty of Nursing

* 現所属は、福山平成大学看護学部 Fukuyama Heisei University, Faculty of Nursing

** 現所属は、東京医療保健大学東が丘・立川看護学部 Tokyo Healthcare University Higashigaoka・Tachikawa Faculty of Nursing

ている。子どもの自殺は、1970年代より社会的問題として注目されてきたが、青少年の自殺が減少しない現状は、日本の重要な課題であり、健やか親子21（第2次）の基盤課題B：「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」にも「十代の自殺死亡率の減少」が評価目標に追加されている。

近年では、文部科学省を中心に自殺予防教育に取り組み、学校教育においては「いのちの教育」として、いのちの大切さを道徳や体験を通して考える取り組みが行われている（文部科学省，2008）。「いのちの教育」には、生命が誕生すること、人間尊重、生きること、死ぬことなど、さまざまな視点からの内容が含まれる。赤澤（2001）は、「子どもの心の荒廃が懸念されている現在、“心の教育”が提唱されているが同時に“生と死の教育”の必要性も高まってきているといえる。生と死の教育は子どもに不安や恐怖を与えるのではなく、生きていることの大切さや生かされていることの尊さを体験させることが目的である。」と述べている。

幼児や児童をもつ母親は、「いのちの教育」の必要性を感じ、「いのちの教育」は親がすべきことと感じながらも、実際に行うことは困難だと感じていることが多いと質問紙調査の結果から示されている（林，2010；角ら，2012）。また、林（2012）によるインタビュー調査から、死別経験時の子どもへの悲嘆ケアに対する母親の関わりは、【死別までの母親の関わり】【死別後の母親の関わり】【母親の疑問と不安】であったことが明らかになっている。具体的には、母親は子どもの理解度・感受性に合わせた説明に苦慮しながらも、子どもにありのままを見せ、感情を伴う経験を持たせるように関わり、子どもの悲嘆反応に困難感を持つことなく対応していたことが示されている。しかし、死別に限らず、家庭での生死を通したい

のちの教育を母親がどのように認識し、どのように行っているかを調査した研究は見当たらない。

以上のことから、本研究では、幼児をもつ母親を対象に、家庭での子どもへの「いのちの教育」に対する母親の意識と、実際の子どもへの関わりについて明らかにすることを目的とした。そして、これは今後の家庭における子どもへの「いのちの教育」に関する支援に繋がると考えられる。

Ⅱ. 用語の定義

本研究における「いのちの教育」とは、いのちや生と死を見つめ考えることを通して、今あるいのちの重みや大切さへの気づきや理解を深めていこうとする教育とする。

また、「母親の意識」とは、母親の生や死に対するイメージ、体験に基づいた生死の認識、出産前後のいのちに対する価値観の変化、子どもへの「いのちの教育」に対する考えや思いなどとする。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究デザイン

研究デザインは、質的記述的研究デザインを用いた。

2. 研究対象者

幼児期（2歳～小学校入学前まで）の子どもを持つ母親とした。ただし、死産や子どもの死を経験したことのある母親は、対象外とした。

3. 研究対象者の選定理由

子どもの年齢は、子どもの死の概念が形成され始めるのは幼児前期からであること、死の不可逆性・普遍性を理解できるのは5歳前後であ

ること、事物に意識や生命があるとするアニミズムの考えをもつ幼児は多いとの報告（赤澤，2001）から、生または死の視点により「いのち」を感じ理解することができるかと判断した、2歳から小学校入学までの幼児を持つ母親とした。

4. 調査期間

平成29年5月～9月

5. データ収集方法

対象者は、関東圏に在住する母親で、助産所の所長からの紹介と、コンビニエンスサンプリングとスノーボールサンプリングを併用して募集した。研究参加への同意が得られた母親に対して、インタビューガイドに基づき、母親の生や死に対するイメージや体験、家庭での子どもへの“いのちの教育”に関する内容について、60分程度の半構成的面接を行った。

6. データ分析方法

インタビュー内容の全てを逐語録に起こし、子どもへの「いのちの教育」に対する母親の意識と子どもへの関わりの実際に関連したデータを抽出した。その後、抽出した内容を幼児～学童期、青年～成人期、妊娠・出産・育児期の時期別に経時的に整理し、類似性と相違性に従って分類を行い、同じ意味を持つコードのグループを作り、グループ毎に最も意味をよく表すと考えられる名前をつけてサブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。また、分析の全過程において、定期的に看護学、質的研究の専門家らにスーパーバイズを受け、データの確証性の確保に努めた。

7. 倫理的配慮

本研究における倫理的配慮として、次の点に留意した。

研究対象者と研究対象候補者の紹介を依頼した助産所所長には、研究の趣旨・意義・内容・方法等について、口頭と文書で説明を行い、同意書に署名を得た。また、インタビュー当日、研究対象者の母親に対して、参加は自由意思であること、参加拒否により不利益は生じないこと、知り得た情報は個人や施設が特定されないように匿名化し、施錠できる場所で研究者以外は閲覧できないよう厳重に管理することを再度説明し、保証した。インタビュー内容は、母親の許可を得てICレコーダーに録音した。本研究は、「創価大学人を対象とする研究倫理委員会」の承認を得て実施した（承認番号：29011）。

IV. 結果

1. 研究対象者の概要

研究対象者は8名で、30代が7名、40代が1名であった。就業状況は、就業ありが6名、就業なしが2名であった。研究対象者の子どもは1～3名で、夫の年齢は30代が4名、40代が4名であった。また、対象者の生死に関する体験について、幼児～学童期、青年～成人期、妊娠・出産・育児期の時期別に示した（表1）。

母親8名のインタビュー内容から、子どもへの「いのちの教育」に対する母親の意識と実際の子どもへの関わりについて、7のカテゴリーと22のサブカテゴリー、103のコードが抽出された。以下、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは< >、コードは「 」で内容を示す。

表1 対象者の概要

対象者の背景					対象者の生死に関する体験(時期別)		
年齢/ 就業の有無	夫の 年齢	第1 子	第2 子	第3 子	幼児～学童期	青年～ 成人期	妊娠・出産・育児期
A 30代 就業なし	30代	8歳 女	6歳 女	3歳 男	・祖父の死(小学生)		・稽留流産(初回妊娠) ・息子がやけどで入院 ・祖母の死
B 30代 就業あり	40代	4歳 男			・祖父母とお墓参り ・祖父母から戦争の話 ・犬の死(小学生)	・産婦人科 勤務	・切迫早産で入院(第1子) ・出産時、出血性ショック ・子どもとお墓参りに行く
C 30代 就業あり	40代	6歳 女	3歳 男		・犬の死		・子どもと妊婦健診に行く ・出産後、子どもと入院 (第2子) ・夫の病気
D 30代 就業あり	30代	4歳 女	0歳 女		・曾祖母の死 ・金魚の死		・助産所で立会い出産 (第2子)
E 30代 就業あり	30代	5歳 女	0歳 女		・金魚の死	・祖母の死 (高校生)	・夫と「いのちの講座」に 参加
F 40代 就業なし	40代	7歳 男	4歳 男	1歳 女	・小鳥の死 ・曾祖母の死(小学生)	・祖父の死 (高校生) ・友人の死	・助産所で立会い出産 (第2子) ・自宅で立会い出産 (第3子)
G 30代 就業あり	30代	5歳 男	2歳 男		・祖父母から戦争の話	・友人の 自殺	・友人の死
H 30代 就業あり	40代	6歳 男			・祖母の死 ・ペットの死		・妊娠先行結婚、切迫早産 で入院 ・早産、児NICUに入院 ・実母の病気

2. 死のイメージと死に関する体験(表2)

1) 【混在する死のイメージと捉え方の変化】

このカテゴリーは、3つのサブカテゴリー<ネガティブな死のイメージ><ネガティブではない死のイメージ><身近な生死を通じた死の捉え方の変化>で構成された。

<ネガティブな死のイメージ>では、「子どもの頃、死のことを聞きにくい雰囲気やタブーなイメージ」「死は全部終わりで取り返しがつかない感じ、喪失感やネガティブなイメージ」を抱いていた。

<ネガティブではない死のイメージ>では、「学生の頃は死ぬ気はないが、死は格好よくて憧れる気持ち」を抱いたり、「何か成し遂げたり寿命を

全うした人の死はネガティブではない」と捉えていた。

<身近な生死を通じた死の捉え方の変化>では、自身の出産で子どもの生と死を考えたことから「出産後、親の死など漠然としていたものが怖いものになった」、また「親になってから夫と共通の友人が亡くなり、高校生の頃とは死の捉え方が違っている」など身近な人の死を経験し、死に対する捉え方が変化していた。

2) 【幼少期からの死に関する体験】

このカテゴリーは、5つのサブカテゴリー<記憶に残る死に対する親や祖父母の関わり><ペットの死に直面した体験><身近に感じなかった死

表2 死のイメージと死に関する体験

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
混在する死のイメージと捉え方の変化	ネガティブな死のイメージ	<ul style="list-style-type: none"> ・亡くなることは悲しい気持ち ・死は全部終わりで取り返しがつかない感じ、喪失感やネガティブなイメージ ・子どもの頃、死のことを聞きにくい雰囲気やタブーなイメージ
	ネガティブではない死のイメージ	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の頃は死ぬ気はないが、死は格好よくて懂れる気持ち ・何か成し遂げたり寿命を全うした人の死はネガティブではない
	身近な生死を通じた死の捉え方の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・出産後、親の死など漠然としていたものが怖いものになった ・親になってから夫と共通の友人が亡くなり、高校生の頃とは死の捉え方が違っている
幼少期からの死に関する体験	記憶に残る死に対する親や祖父母の関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・祖父が亡くなる経過を見せることで、母が死を考える機会をくれた ・戦争で生き延びた話を祖父母から聞いたり、親と一緒にテレビを見た ・死んだ祖父母や犬は天国や空で見てくれていると聞かされた ・祖父母がお墓参りに連れて行ってくれた ・親に動物が死ぬ絵本を読んでもらった記憶はある ・親から死について教えられた意識や経験はない
	ペットの死に直面した体験	<ul style="list-style-type: none"> ・親に教えられた記憶はないが、犬を通して死を学んだ ・小鳥の死がすごくショックで、罪悪感を感じた ・両親と一緒に死んだペットを庭に埋めてお別れた ・ペットが死んで一人でお墓を作り、母は線香を持ってきた ・ペットの死でまた辛い目に遭わせたくないからと、犬を飼えなかった
	身近に感じなかった死の体験	<ul style="list-style-type: none"> ・遠くの祖母やペットを亡くしたが、死でダメージを受けたことがない ・曾祖母が亡くなったときは小学生で、悲しい感じはまだなかった ・祖父母が老いていく様子も見えていないし、葬式に出る機会もなかった ・親族の死には運よく直面しなかった
	身近な祖父母の死に衝撃を受けた体験	<ul style="list-style-type: none"> ・祖父の死で人が亡くなる過程を初めて見て、もうすぐ死ぬことを感じた ・祖母が長くは生きられないことを聞いて死を迎える覚悟はあった ・祖父母の死はすごく悲しくて、お腹に穴が開いたようなショックな体験だった ・死の過程を見たのは衝撃的で、祖父の遺骨を拾う場面は覚えている
	友人を突然亡くした学生時代の体験	<ul style="list-style-type: none"> ・友人の死を体験し、笑顔や楽しかったことを思い出して悲しくなった ・予期しない友人の自殺に衝撃を受け、気持ちがざわざわした ・友人を亡くした親友への接し方がわからなかった

の体験> <身近な祖父母の死に衝撃を受けた体験> <友人を突然亡くした学生時代の体験>で構成された。

<記憶に残る死に対する親や祖父母の関わり>では、「祖父母がお墓参りに連れて行ってくれた」「戦争で生き延びた話を祖父母から聞いたり、親と一緒にテレビを見た」こと、また「祖父が亡くなる経過を見せることで、母が死を考える機会をくれた」ことなどから、子どもの頃に祖父母や親を通して死について意識し、「死んだ祖父母や犬は天国や空で見てくれていると聞かされた」経験をしていた。また、「親に動物が死ぬ絵本を読ん

でもらった記憶はある」が、直接「親から死について教えられた意識や経験はない」と認識していた。

<ペットの死に直面した体験>では、飼い犬が亡くなる辛い体験を再びさせないようにという親の配慮があったが、ペットの死に直面したことで「小鳥の死がすごくショックで、罪悪感を感じた」体験をしていた。また、「ペットが死んで一人でお墓を作り、母は線香を持ってきた」ことから、ペットを家族とともに弔う体験をしていた。

<身近に感じなかった死の体験>では、実際に「親族の死には運よく直面しなかった」ことや、

自身が幼かったこと、遠くに住んでいたことから、親族を亡くしてもダメージを受けなかった体験であった。

＜身近な祖父母の死に衝撃を受けた体験＞では、祖父母の死で人が亡くなる過程を見たり、長くは生きられないことを聞かされて死を意識する体験をしていた。また、火葬後に遺骨を拾う衝撃的な場面に遭遇し、「祖父母の死はすごく悲しくて、お腹に穴が開いたようなショックな体験だった」と祖父母の死そのものにも強いショックを受けていた。

＜友人を突然亡くした学生時代の体験＞では、

予期しない友人の死に衝撃を受けた体験とともに、「友人を亡くした親友への接し方がわからなかった」体験から、友人の突然の死で親友への接し方にも戸惑いを感じていた。

3. 母親の妊娠・出産を通したいのちや生に対する意識といのちの教育 (表3)

1) 【妊娠・出産で深まったいのちや生に対する意識】

このカテゴリーは、2つのサブカテゴリー＜妊娠・出産により身近に感じる生＞＜出産で深まったいのちへの意識＞で構成された。

＜妊娠・出産により身近に感じる生＞では、自

表3 母親の妊娠・出産を通したいのちや生に対する意識といのちの教育

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
妊娠・出産で深まったいのちや生に対する意識	妊娠・出産により身近に感じる生	<ul style="list-style-type: none"> ・流産の経験から生まれることは嬉しいこと、生は喜びと思える ・生はやっぱり、生まれる、温かい、輝いているイメージ ・生は妊娠したとき実感がなかったが、お腹の中で動く生々しい感じ ・妊娠・出産で生を考えた
	出産で深まったいのちへの意識	<ul style="list-style-type: none"> ・切迫と出血性ショックの経験から人を産むことは大変だと分かった ・死にそうになり助かったから、生を全うしたいし、ちゃんと育てたい ・嬉しいだけではなく障害を持つ悩みや責任などがあり、単純ではない ・出産して、子どものために自分のいのちを懸けて守っていききたい ・妊娠・出産で、子どものいのちを通して自分のいのちを強く認識した
妊娠・出産を通して児から感じるいのちの存在	妊娠中に向き合ういのちの存在	<ul style="list-style-type: none"> ・流産したので見えない赤ちゃんが生きているか生まれるまで不安 ・1人目の妊娠中は自分の中にもう1ついのちがあることが不思議だった ・心構えなく妊娠したが、切迫早産で入院し赤ちゃんと向き合えた
	出産して実感した児のいのちとその不思議さ	<ul style="list-style-type: none"> ・初めて泣き声を聞き、生きているものを産んだ安堵感で泣いた ・生まれてやっと会えて不安が一気に解消され、抱っこしたらもう幸せ ・本当に温かくて凄い、子どもを産めて本当に嬉しい幸せな気持ち ・妊娠中と産後1ヶ月くらいは、小さくて不思議で消えそうで怖かった ・帝王切開で産み落とすのを感じられず、最初は不思議な感じ ・生まれた赤ちゃんを自分が作りあげた不思議な感じ
妊娠・出産を通したいのちの教育	妊娠・出産を通した上の子への関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・上の子には妊娠8か月のとき、赤ちゃんが生まれることを伝えた ・赤ちゃんを一緒に迎えたくて上の子も健診に同伴し、出産後も一緒に泊まった ・生まれることについて外国の性教育の絵本を買って読んでいた ・話すのは得意ではないから、実際に見て赤ちゃんを大事に思っていた ・出産や赤ちゃんの時の話をしたり、写真を見せて伝えた
	妊娠・出産時の上の子の経験と反応	<ul style="list-style-type: none"> ・上の子は、お腹に触り話かけたり、お腹の中のことを感じていた ・出産に立ち会った体験で赤ちゃんを素直に受け入れた ・さすがに怖くて臍の緒は切れなかったが、見ていてくれた ・早く生まれてきてと楽しみで、誕生に嬉しさ爆発 ・立ち会ったことを誇りに思い、赤ちゃんがかわいくて仕方ない

身の妊娠・出産の体験から、「生はやっぱり、生まれる、温かい、輝いているイメージ」を持ち、「流産の経験から生まれることは嬉しいこと、生は喜びと思える」など、生まれるいのちに明るいイメージを感じていた。また、「生は妊娠したとき実感がなかったが、お腹の中で動く生々しい感じ」であり、妊娠中の胎動から生を実感していた。

＜出産で深まったいのちへの意識＞では、「切迫と出血性ショックの経験から人を産むことは大変だと分かった」「妊娠・出産で、子どものいのちを通して自分のいのちを強く認識した」経験があり、「死にそうになり助かったから、生を全うしたいし、ちゃんと育てたい」「出産して、子どものために自分のいのちを懸けて守っていききたい」という気持ちが生まれていた。また、「嬉しいだけでなく障害を持つ悩みや責任などがあり、単純ではない」と感じ、いのちの誕生には喜びだけでなく、親として思いもよらない悩みや責任があると感じていた。

2) 【妊娠・出産を通して児から感じるいのちの存在】

このカテゴリーは、2つのサブカテゴリー＜妊娠中に向き合ういのちの存在＞＜出産して実感した児のいのちとその不思議さ＞で構成された。

＜妊娠中に向き合ういのちの存在＞では、「1人目の妊娠中は自分の中にもう1つのちがあることが不思議だった」と思ったり、「流産したので見えない赤ちゃんが活着ているか生まれるまで不安」で、お腹の中にいる赤ちゃんに対して不確かさを感じていた。また、「心構えなく妊娠したが、切迫早産で入院し赤ちゃんと向き合えた」と感じ、妊娠中の入院が胎児に向き合うきっかけになった体験もしていた。

＜出産して実感した児のいのちとその不思議さ＞では、流産や早産を乗り越え、「初めて泣き

声を聞き、活着ているものを産んだ安堵感で泣いた」体験をし、「生まれてやっと会えて不安が一気に解消され、抱っこしたらもう幸せ」と感じ、「本当に温かくて凄いい、子どもを産めて本当に嬉しい幸せな気持ち」を心から実感していた。また、「帝王切開で産み落とすのを感じられず、最初は不思議な感じ」を抱き、「妊娠中と産後1ヶ月くらいは、小さくて不思議で消えそうで怖かった」と思いつつも、「生まれた赤ちゃんを自分が作りあげた不思議な感じ」と捉えていた。

3) 【妊娠・出産を通していのちの教育】

このカテゴリーは、2つのサブカテゴリー＜妊娠・出産を通して上の子への関わり＞＜妊娠・出産時の上の子の経験と反応＞で構成された。

＜妊娠・出産を通して上の子への関わり＞では、「赤ちゃんと一緒に迎えたくて上の子も健診に同伴し、出産後も一緒に泊まった」体験をもち、いきなり赤ちゃんがきたと上の子に思わせないように関わっていた。また、子どもが少し大きくなってからも、「出産や赤ちゃんの時の話をしたり、写真を見せて伝えた」など、意図的に関わっていた。

＜妊娠・出産時の上の子の経験と反応＞では、「上の子は、お腹に触り話かけたり、お腹の中にいることを感じていた」体験を通して、赤ちゃんが生まれてくることをとても楽しみにしていた。また、出産時、「出産に立ち会った体験で赤ちゃんを素直に受け入れた」ことで、上の子は「立ち会ったことを誇りに思い、赤ちゃんがかわいくて仕方ない」と母親は捉えていた。

4. いのちの教育に対する母親の意識と子どもへの関わり (表4)

1) 【子どもの成長や保育園に合わせた関わり】

このカテゴリーは、4つのサブカテゴリー＜い

表4 いのちの教育に対する母親の意識と子どもへの関わり

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
子どもの成長や保育園に合わせた関わり	いのちの教育の意識や機会がない	<ul style="list-style-type: none"> ・他のいのちを頂くことは意識していないが、子どものお陰でいのちに気づいた ・いのちの教育を身近であんまり考えたことなかった ・命に関する絵本を意図的に選んだことはないし、家にもない ・家庭でいのちの教育をする機会がない ・話す機会はつくりたいが、きっかけや元になるものがないと話さない気がする
	伝え方が難しく分からない	<ul style="list-style-type: none"> ・その時にどう話すかは分からない ・死に関することを子どもに聞かれ、うまく言えなくて困った ・いのちについて確かな考えはないが、質問されたら素直に自分の気持ちを話す ・いのちの格付けに感じる矛盾や子どもの反応を思うと、説明するのは難しい ・いのちは簡単なものではないという思いが無意識にある ・話を聞いて繋がる体験がないと学校でのいのちの話は響かない
	子どもに話す時期や準備を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもがまだ小さいので、ママ友達といのちの教育の話はしない ・今は困ってないが、学校に行くようになったら時間を設けてちゃんと話す ・怖いニュースは見せてないので、死に触れる機会は虫以外はない ・親の知識や価値観の話になるので、いろんな場所で話を聞いてほしい ・親を教育する場や本、子ども達が健やかに育つ環境があるといい ・話す材料を持つために、助産師さんのいのちの講座を夫と一緒に聞きに行った
	保育園でのいのちの教育を活かして関わる	<ul style="list-style-type: none"> ・保育園ではいのちの大切さを育みたいので生き物を飼っている ・保育園で飼っていた犬が死んで、みんなでお別れをして埋葬した ・死んだ犬は星になって見守ってくれると聞いてきて、話を合わせる ・死を話せないが、保育園で話してくれるので助かるし安心 ・人が生まれて死ぬまでの話を保育園で聞いてきて、家でも話してくれる ・保育園でのペットの死がよい体験になったことを夫婦で話した
生き物を通した夫婦での補完的な関わり	生き物を通していのちの大切さを伝える	<ul style="list-style-type: none"> ・一生懸命生きてるから、むやみに生き物は殺さないでねと話す ・植物や生き物の世話から得てほしいから虫を飼う ・虫は寿命が短いことや、小さい生き物は暑さに弱いと説明した ・自分の責任で世話をしなさいと、夫は上の子に言っていた ・ちゃんと世話をして死んだら、ありがとうと一緒に庭に埋める
	いのちを大切にできるように親の価値観を伝える	<ul style="list-style-type: none"> ・先祖は見守ってくれるので、お墓参りで感謝を伝える ・形はないけど、どこかに魂はあると話す ・死んだ金魚を実母と一緒に埋めたことは、きっと影響している ・自分や他人を傷付ける、物を壊す、いのちを軽々しく扱うのはいけないと伝える ・自分や相手のいのちを同じように大事にするよう伝えたい ・入院して生きてほしい気持ちが強くなり、死ぬことがないように注意する
	夫婦で考えを伝え合い子どもに関わる	<ul style="list-style-type: none"> ・夫とは必要になった時に話す ・虫や魚のいのちについて、これからもお互いの考えを伝え合い、接点を見つける ・役割は分かれておらず、方向性が一緒なので大切にしている ・子どもに話すのは多分私で、夫には大事なことを短く話してもらう ・虫は苦手なので夫に担当してもらう ・講座を聞いて、自分の体を大切にしてほしいと夫婦で思う
関わる中で捉えた子どもの様子	<ul style="list-style-type: none"> ・死は怖いイメージはなく、終わっちゃったという感じ ・友達の影響で死ぬという単語を覚えると言葉で遊びたがる ・子どもは怖くなり、青虫を埋めるのを見たくない感じだった ・動物や昆虫の死にショックを受ける心配をしたが、しっかりお別れできた ・料理をする時、いのちをくれているのかと尋ね、いのちの繋がりを感じている ・病人の話をするとう大丈夫かなと相手の気持ちを察する力も育っている 	

のちの教育の意識や機会がない> <伝え方が難しく分からない> <子どもに話す時期や準備を考える> <保育園でのいのちの教育を活かして関わる>で構成された。

<いのちの教育の意識や機会がない>では、「家庭でのいのちの教育をする機会がない」と思い、また「話す機会はつくりたいが、きっかけや元になるものがないと話さない気がする」と感じていた。その一方で、「他のいのちを頂くことは意識していないが、子どものお陰でいのちに気づいた」という思いを抱き、子どもとの関わりの中でいのちに気づかされた体験をしていた。

<伝え方が難しく分からない>では、実際に「死に関することを子どもに聞かれ、うまく言えなくて困った」体験や、いのちについて説明することは「いのちの格付けに感じる矛盾や子どもの反応を思うと、説明するのは難しい」という困難感を抱き、いのちの話を子どもにどのように伝えればよいか、具体的な伝え方のイメージが持ていなかった。

<子どもに話す時期や準備を考える>では、「今は困ってないが、学校に行くようになったら時間を設けてちゃんと話す」と思い、いのちについて話すのは子どもがもう少し年齢を経た時期を想定し、「話す材料を持つために、助産師さんのいのちの講座を夫と一緒に聞きに行った」ことで、子どもへの説明に備えて行動していた夫婦もいた。

<保育園でのいのちの教育を活かして関わる>では、いのちの大切さを育むために保育園では生き物を飼っており、「死んだ犬は星になって見守ってくれると聞いてきて、話を合わせる」ことをしていた。また、親は上手く死について話せないが、ペットの死を通して子どもが保育園でよい体験をしたと夫婦で感じていた。

2) 【生き物を通した夫婦での補完的な関わり】

このカテゴリーは、4つのサブカテゴリー<生き物を通していのちの大切さを伝える> <いのちを大切にできるように親の価値観を伝える> <夫婦で考えを伝え合い子どもに関わる> <関わる中で捉えた子どもの様子>で構成された。

<生き物を通していのちの大切さを伝える>では、家庭でも、「植物や生き物の世話から得てほしいから虫を飼う」ことにより、子どもが生き物を飼う責任や生き物の立場を考えられるような関わりをしていた。また、「ちゃんと世話をして死んだら、ありがとうと一緒に庭に埋める」ことを通して、いのちの大切さを伝えていた。

<いのちを大切にできるように親の価値観を伝える>では、魂はどこかにあることを話したり、「先祖は見守ってくれるので、お墓参りで感謝を伝える」ことで、目には見えないいのちを大切に思う親の生死に関する価値観を子どもに伝えていた。また、いのちを軽々しく扱うのはいけないと伝えたり、「自分や相手のいのちを同じように大事にするよう伝えたい」と考えていた。

<夫婦で考えを伝え合い子どもに関わる>では、いのちについて学べる出来事があった時に、「虫や魚のいのちについて、これからもお互いの考えを伝え合い、接点を見つける」ことや、夫婦で方向性を確認し、必要な時はお互いに役割を担っていくことを考えていた。

<関わる中で捉えた子どもの様子>では、日々の生活の中で、「料理をする時、いのちをくれているのかと尋ね、いのちの繋がりを感している」と子どもを捉えていた。また、飼っていた生き物が亡くなった時の子どもの様子から、「動物や昆虫の死にショックを受ける心配をしたが、しっかりお別れできた」と思い、親が心配するよりも子どもは死を受け止められたと感じていた。

V. 考察

1. 家庭での「いのちの教育」に対する母親の意識

母親は、家庭での「いのちの教育」について、
〈いのちの教育の意識や機会がない〉〈伝え方が
難しく分からない〉と認識していた。また、死
のイメージとして、亡くなることは悲しいことで
あり、死は聞きにくい雰囲気やタブーなイメージ
であると捉えていた。そして、子どもの頃の死に
関する体験では、〈記憶に残る死に対する親や祖
父母の関わり〉〈ペットの死に直面した体験〉
〈身近に感じなかった死の体験〉〈身近な祖父母
の死に衝撃を受けた体験〉〈友人を突然亡くした
学生時代の体験〉など、さまざまな体験を持って
いた。その多くは、「親から死について教えられ
た記憶や経験はない」「親から教えられた記憶は
ないが、犬を通して死を学んだ」「親に動物が死
ぬ絵本を読んでもらった記憶はある」という体験
から読み取れるように、親から死について教えら
れたと認識できるほどの明確な記憶や経験ではな
く、不確かなものと考えられた。

死やいのちに対する概念形成には、幼児期から
子どもの身近にいる親から受けた「いのちの教育」
が大きく影響すると言われている(角ら, 2012)。
また、角ら(2012)の調査では、過半数の親が死
に対する不安・恐怖という「いのちの教育」のネ
ガティブな側面を意識していたが、子どもに生き
ることを意味を考えさせる親の方が「いのちの教
育」への意欲が高く、困難感が低かったことが示
されている。これらのことから、生きることを意
味を考えさせる「いのちの教育」を自分の親から
受けていない母親は、子どもへの「いのちの教
育」に対して困難感を抱いてしまうことは容易
に推察できる。また、現代の親は、死をタブー視

する社会的環境や、親以外の人が子どもの教育に
関わるのが少ない核家族で育っていることから
も、死という言葉に動揺してしまうことは少なく
ないと考えられる。これらのことから、家庭での
「いのちの教育」を担う親の困難感を軽減するた
めに、支援を行う必要性が明らかとなった。現状
では、地域や学校による親への支援は、ほとんど
実施されていない。子どもへの説明に備えて、「話
す材料を持つために、助産師さんのいのちの講座
を夫と一緒に聞きに行った」夫婦もいたことから、
親が単独で行うのではなく、家族の協力を得なが
ら地域や保育園、学校との連携のもとで行われ
ることが必要と考える。

一方、幼児を育てている母親は、【妊娠・出産
を通して児から感じるいのちの存在】や、【妊娠・
出産で深まったいのちや生に対する意識】を持
っていた。女性にとって、妊娠・出産を通して児
を育むことは、直接的ないのちの実感を高められ
る貴重な体験と考えられる。「いのちの教育」へ
の態度と死別経験の有無との関連では、過去5年
以内に親しい人との死別経験がある人はない人に
比べて、「いのちの教育」に対し意欲的な態度を示
すことが明らかにされている(林, 2011)。親し
い人との死別を経験した人は、自分や他人の生や
死をあらためて見つめ直したことで、子どもに対
する「いのちの教育」に対しても必要性を認識
し、意欲的な姿勢を示すのではないかと考えられ
る。これと同様に、出産経験を持つ女性は、自分
や子どものいのちを見つめ直すことができ、いの
ちの大切さを実感することにより、子どもに対し
て「自分や相手のいのちを同じように大事にする
よう伝えたい」と意識していたと考えられる。林
(2012)は、家庭で子どもに死について教える事
は必要なことだと思うと解答した母親は、9割以
上であったと報告している。多くの母親は、いの

ちの教育という言葉に戸惑いながらも、いのちの教育に強い関心を示し、子どもに対して生や死について話し合い、考えようとする心構えを持っているものと考えられる。

そして実際、家庭での子どもへの「いのちの教育」において、【生き物を通した夫婦での補完的な関わり】の過程で、＜関わる中で捉えた子どもの様子＞を「死は怖いイメージはなく、終わっちゃったという感じ」「料理をする時、いのちをくれているのかと尋ね、いのちの繋がりを感じている」など、様々な在り様の子どもの反応として捉え、子どもの成長や状況を理解しながら「いのちの教育」をしていると考えられた。

2. 子どもへの「いのちの教育」に対する母親の関わり

「いのちの教育」に対する母親の関わりとして、【妊娠・出産を通したいのちの教育】が明らかになった。母親は、妊娠・出産時から上の子に対して、生まれてくる赤ちゃんと一緒に迎えるために妊婦健診に連れて行ったり、出産時にも立ち会わせたり、臍の緒を切る場面を見せるなどして、生まれるいのちを伝える関わりを意図的にしていた。

また、【子どもの成長や保育園に合わせた関わり】に示されるように、幼児期の子どもはまだ小さいので小学校に行くようになったら話そうと死の話題に触れることは先送りし、「子どもに話す時期や準備を考える」ことはしているが、死についての家庭でのいのちの教育に対しては消極的な姿勢がうかがわれた。その一方で、子どもが通う保育園では、いのちの大切さを育むために生き物を飼っており、死んだときは皆でお別れをして、きちんと埋葬することで子どもが死を身近に捉え、いのちを考えられるように意図的に関わっていると考えられた。そして、このような保育園での子

どもの体験を母親は肯定的に捉え、子どもの体験に話を合わせて「保育園でのいのちの教育を活かして関わる」ことをしていた。子どもは、ペットが死んだり、身近な人の死から、死に対して好奇心や疑問を抱いて親に尋ねることがある。Deeken (1989) は、親はその時の状況に合わせて、子どもが理解できるように事実を話すことが大切であると述べている。今回の調査でも、母親は、いのちについて質問されたら素直に自分の気持ちを話すと答えていた。また、いのちの教育の実際の関わりでは、父親より母親の方が有意に行動していると回答した割合が多かったという報告もある(角ら, 2012)。このように、目の前で起こっている出来事に対して、子どもが実際に見て自ら感じ取ること、さらに、子どもからの疑問に対して、ありのままを率直に話すことを、母親は重要視していると考えられた。

これらのことから、子どもへの「いのちの教育」に対する母親の関わりでは、幼児期の子どもを持つ母親は、いのちや生や死を見つめ考える体験を通して子どもにありのままを見せ、感情を伴う経験を持たせることを大事にし、子どもの成長や状況に合わせて、いのちや生や死について話そうと準備しながら、実際に子どもに聞かれたら自分の気持ちを話すことで、子どもに「いのちの教育」をしていると考えられた。

さらに、夫婦で考えを伝え合い、【生き物を通した夫婦での補完的な関わり】をしていることが明らかになった。普段の生活の中で、子どもと接する時間や機会の多い母親は、夫とは必要な時に話し合い、虫や魚のいのちについて、お互いの考えを伝え合い、接点を見つけようとしていた。また、お互いの役割は明確ではないが、夫には大事なことを話してもらい、虫は苦手なので夫に担当してもらおうと考え、夫婦での子どもへの関わり

を大切にしている姿勢が窺えた。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究では、研究協力施設が1施設であり、コンビニエンスサンプリングとスノーボールサンプリングを併用し、関東圏に在住する母親8人を対象としたため、得られた内容に偏りが生じている可能性が考えられる。したがって、今後はより多くの母親を対象にできるよう、研究施設の拡大をしていく必要がある。また、今回の調査では、幼児期の子どもを持つ母親を対象としているため、今後は子どもの成長・発達に応じて、時期別に家庭での「いのちの教育」の実際や親のニーズを把握し、その支援について検討する必要がある。

(本研究における利益相反はない)

謝辞

本研究にあたりインタビューにご協力いただきましたお母様方、対象者の紹介にご尽力いただきました助産所所長に心より御礼申し上げます。

引用文献

- 赤澤正人 (2001). 子どもの死の概念について. 臨床死生学年報, 6, pp.130-137. doi:10.18910/7513
- Deeken, Alfons. (1989). 死への準備教育. 医学のあゆみ, 150(5), pp.333-335.
- 林和枝 (2010). 母親を対象としたいのちの教育に関する意識. ホスピスケアと在宅ケア, 18(1), pp.31-36.
http://mol.medicalonline.jp/library/journal/download?GoodsID=cx5hospc/2010/001801/007&name=0031-0036j&UserID=150.37.250.68&base=jamas_pdf
- 林和枝 (2011). 子どもへのいのちの教育に対する親の態度尺度作成の試み. 死の臨床, 34(1), pp.105-109.
- 林和枝 (2012). 家庭におけるいのちの教育とその実際. Journal of International Society of Life Information Science, 30(1), pp.106-111.
http://mol.medicalonline.jp/library/journal/download?GoodsID=cb2lifin/2012/003001/018&name=0106-0111j&UserID=150.37.250.68&base=jamas_pdf

- 角智美, 川波公香, 市村久美子 (2012). 子どもへの Death Education 行動に関連する親の意識. 茨城県立医療大学紀要, 17, pp.41-50.
- 厚生労働省. 平成 28 年人口動態統計月報年計 (概数) の概況, 2016
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai16/dl/h7.pdf>
- 文部科学省ホームページ. 児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議 (第 1 回) 配付資料, 2008
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/046/shiryo/attach/1376322.htm
- 内閣府. 平成 28 年版 子供・若者白書, 2016
http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h28honpen/s3_2.html#z3_34
- 健やか親子 21 公式ホームページ, 2015
http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/index_001.htm 検索日 10/29